



2022年度日本語教育学会 各賞受賞者・受賞論文

理念体系の策定過程における事業再編で、学会の表彰事業を所掌する表彰委員会が設置されました。学会の「事業の3本柱」である学術研究・教育実践・情報交流の促進という事業方針を念頭において、各賞の位置づけや選考基準が明確になりました。新制度における各賞の表彰の対象者及び選考基準は、以下のとおりです。

学会賞：日本語教育に関してめざましい業績・成果があり、今後も活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

奨励賞：日本語教育に関して注目すべき業績・成果があり、将来の活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

功労賞：日本語教育界において長年の業績があり多大な貢献をした個人または団体に贈られます。

『日本語教育』論文賞：各年度、学会誌『日本語教育』に掲載された研究論文、調査報告、実践報告のうち、特に優れていると認められた論文に贈られます。

学会活動貢献賞：日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし、隔年で対象を変えて表彰します。今年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力者として10年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった学会の個人会員に贈られます。

各賞の選考過程

①学会賞・奨励賞・功労賞は、理事・監事・代議員・委員会委員の推薦を受けた候補、②論文賞は、学会誌委員会に置かれた候補論文選考部会の推薦を受けた候補論文、③学会活動貢献賞は、客観的なデータに基づき、表彰委員会の推薦を受けた候補が、会長・理事・代議員・各常置委員会委員より構成される授賞候補選考委員会に提出されました。授賞候補選考委員会の最終選考の審議を経て、理事会で最終的に決定しました。

2022年度の各賞の受賞者・受賞論文及びその授賞理由を、次ページよりご紹介します。

受賞者の皆様、おめでとうございます。益々のご活躍をお祈りいたします。

2022年度 日本語教育学会 学会賞

受賞者 いけだ れいこ
池田 玲子 氏

【授賞理由】

池田玲子氏は、日本語教育における作文教育にピア・レスポンスを導入し、その後一貫して協働学習（ピア・ラーニング）の理論と実践に関する実践研究活動をしてこられました。その活動は日本国内にとどまることなく、東アジア、東南アジア、中南米、ヨーロッパ、中央アジア、豪州にまで広がっています。世界の日本語教育実践者や研究者に、研修、ワークショップ、講演を通じて協働学習の普及をしてこられたことは特筆すべきところです。

池田氏のこれまでの貢献は、日本語教育、日本語教師教育において、実践から立ち上がる理論、そしてそこで得られた知見をまた実践に帰していくという往還の中に見出すことができます。共著『ピア・ラーニング入門』（ひつじ書房、2007年・改訂版2022年）では、協働学習の理論と実践を提示し、その後、テキストとして、共著『ピアで学ぶ大学生・留学生の日本語コミュニケーション：プレゼンテーションとライティング』（ひつじ書房、2012年）、共著『ピアで学ぶ大学生の日本語表現 [第2版]』（ひつじ書房、2014年）を出版しました。初年次教育をはじめ、多分野の教育への応用にも力を注がれています。最近では、編著『アジアに広がる日本語教育ピア・ラーニング 協働実践研究のための持続的発展的拠点の構築』（ひつじ書房、2021年）、編著『協働が拓く多様な実践』（ココ出版、2022年）で、さらに研究を進めています。

また、「ケース・メソッド授業」と日本語教育において1990年代から実践されてきた「対話的問題提起学習」をもとに、日本語教育における「ケース学習」を提案しています。その成果は共著『ビジネスコミュニケーションのためのケース学習：職場のダイバーシティで学び合う【教材編】』（ココ出版、2013年）、共著『ビジネスコミュニケーションのためのケース学習：職場のダイバーシティで学び合う【解説編】』（ココ出版、2015年）、共著『“異文化”トラブル解決のヒント！日本人も外国人も ケース学習で学ぼう ビジネスコミュニケーション』（日経HR、2020年）等に見ることができます。これらの内容は、多文化共生社会における多様な人々とのコミュニケーションを学ぶ方法に示唆を与えるものとなっており、テキストとして多くの教育機関で用いられています。

池田氏は、近年、共同代表として協働実践研究会を起ち上げ、世界中に協働学習の学びと実践を拡げて活躍しています。日本語教育の理論構築・実践開発へのあくなき挑戦に敬意を表するとともに、今後のさらなる展開に期待をこめて、池田氏に日本語教育学会学会賞を贈ります。

以上

2022年度 日本語教育学会 奨励賞

受賞者 みなみうら りょうすけ
南浦 涼介氏

【授賞理由】

南浦涼介氏は2010年に広島大学大学院教育学研究科博士課程後期を修了され、現在まで精力的に研究・教育・社会貢献に取り組まれています。特に、近年は、外国につながる子どもたちの存在を念頭においた授業・学校・地域づくりの分野で、大きな功績をあげています。

研究活動としては、「共生社会に向けた『社会とつながる教育評価』の構築—つながりによることばの力の承認」（2020年度-2022年度、科学研究費助成事業基盤研究（C））をはじめ多くの研究課題に研究代表者として取り組まれています。また、単著「JSL 児童生徒のための社会科授業構成—二文化統合理解学習としての単元『私たちのまわりのお店のくふう』をもとに—」（『日本語教育』139号、2008年）や共著「年少者日本語教育における研究課題の変遷—学校と教育の再構築へ向けて—」（『日本語教育』179号、2021年）等の数多くの論文を執筆され、単著『外国人児童生徒のための社会科教育—文化と文化の間を能動的に生きる子どもを授業で育てるために』（明石書店、2013年）や共著での書籍である梅津正美編著『協働・対話による社会科授業の創造—授業研究の意味と方法を問い直す』（東信堂、2020年）等も出版されています。様々な学会・研究会等で招待講演等を行っている実績からも、南浦氏の研究活動が多方面で支持され、求められているものであることが窺い知れます。南浦氏の一連の研究は、社会科や国語科といった教科教育に関する提言という形で、小学校から高等学校に至る教育機関や地域社会に大きな影響を与えています。

教育活動としては、東京学芸大学教育学部人文社会科学系日本語・日本文学研究講座の准教授として教鞭を取られ、将来の教育に資する人材の育成に尽力されています。南浦氏の研究室ホームページでは授業資料等が豊富に公開され、魅力的な教育活動の様子が伝わるばかりでなく、各教育機関の教育者にとって貴重な情報が得られる場になっています。

また、南浦氏は、学外における社会貢献活動にも積極的に取り組まれています。文化庁委託「日本語教育人材の研修プログラム普及事業 児童生徒【初任】」（2022年度、公益社団法人日本語教育学会受託）や「外国籍等児童・生徒のための日本語支援サポーター養成講座」（2022年度、国分寺市国際協会主催）等の講師を務めるほか、数々の研修に携わり、外国につながる子どもたちの学びを支える人材の育成に多くの貢献をされています。

「外国につながる子どもたちを包摂した教育のありかた」を探究し、これからの教育を担う人材の育成に力を注ぐ南浦氏の取り組みは、現在まさに我々が直面する待ったなしの社会課題に応えるものです。以上の功績を称えるとともに、今後のさらなる活躍を期待して、南浦氏に日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2022年度 日本語教育学会 功労賞

受賞者 故・奥田^{おくだ}純子^{じゅんこ}氏

【授賞理由】

奥田純子氏は1970年代後半より日本語教育に携わり、1988年には神戸市にコミュニカ学院を設立し、留学生、ビジネスパーソン、外国籍住民等に対する日本語教育を行ってこられました。また、企業経営者や日本人社員へのインターカルチュラル・コミュニケーション研修にも従事されました。

一般財団法人日本語教育振興協会では、1989年の設立当初から日本語学校の質の向上のために、教員研修事業をはじめ多方面でご活躍なさいました。震災やコロナ禍等による留学生や日本語教育機関の困難な状況に際しては、奥田氏の先導により政府への働きかけのために組織が作られ、大きな動きが生まれました。

就労日本語の分野では、2010年にビジネス日本語研究会を立ち上げ、幹部としてその後の運営に関わられました。その間、シンガポール日本語教師会、ハノイ貿易大学等との連携のもと、アジア各地でセミナーの企画・実行を牽引し、アクティブラーニングの理論と実践を紹介するなど、アジア地域のビジネス日本語教育の発展に多大な貢献をなさいました。

日本における外国人材受け入れ拡大にあたっては、看護と介護の日本語教育研究会、協働実践研究会との協働により、アジア人材還流学会の設立・運営の中心的役割を担われました。さらに、セミナー開催等におけるご尽力により、送り出し国の日本語教育の充実化が進んでいます。

主な著作としては、「教師研修と学校運営」（春原憲一郎・横溝紳一郎編著『日本語教師の成長と自己研修』2006年、凡人社）、単著として「民間日本語教育機関での現職者研修」（『日本語教育』144号、2010年）、「日本語教師のキャリア形成—日本語教育機関の教師へのインタビューを手がかりに—」（『異文化間教育』33巻、2011年）、「日本語教育界の動向—ビジネス関係者のための日本語教育から、キャリア開発のための日本語教育へ—」（『AJALT』、2012年）、「留学生への就職支援としての日本語教育」（『留学交流』Vol.57、2015年）、その他、奥田氏の監修による日本語教材『読む力』（中級2011年、中上級2013年、初中級2020年、くろしお出版）等があります。

また、一般財団法人日本語教育振興協会評議員、ビジネス日本語研究会代表幹事、一般社団法人日本語教育支援協会理事等を歴任されました。異なる文化、分野、機関の協働による事業運営では、奥田氏の強力なリーダーシップによってコンセンサスが形成され、関係者が前向きに取り組める環境が生まれ、多くの事業が成功に導かれました。日本語教育の様々な課題を俯瞰して捉え、分野、経験を問わず、多様な人々を巻き込んで議論する場を作ることに秀でておられました。奥田氏に影響を受けた日本語教育関係者は数多くいることと思われまます。

以上のように多方面から日本語教育の発展に尽くし、多くの人材を育て導いてこられた奥田氏のこれまでの功績を称え、ここに日本語教育学会功労賞を贈ります。

2022年度『日本語教育』論文賞受賞論文

人称表現における複数性と不定性

—「人々」の誤用をめぐる—〔研究論文〕

掲載号：『日本語教育』181号（2022年4月発行）、pp. 111-125

執筆者：牧^{まさあやか}彩花氏（東京国際大学）

【授賞理由】

本研究は、日本語学習者が「人々」という語を誤用・多用していることに着目し、コーパス分析をもとに「人々」の意味・用法の特性を明らかにし、誤用の原因を探ろうとするものである。分析結果から、「人々」は、単に複数性や不定性という視点だけではなく、発話者が指示対象や事態をどのようにとらえているかという発話者の心的態度にも関わっていることを示したことは新しい発見である。また、その分析をもとに、学習者の誤用・多用の原因について多方面から綿密な考察がなされているが、いずれの論拠も明快で説得力があり、現場への応用可能性という点からも高く評価できる。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

実際の使用例をもとにした「人々」の特徴や使用制限、学習者の母語の影響や日本語の数の概念についての考察は、これまで現場で教師が学習者の誤用に違和感を覚えながらも説明しきれなかった表現について丁寧にその特性を示したものであり、現場での指導方法について具体的な示唆を与えるものである。

(2) 新しいテーマにチャレンジしている。

「人々」という語に焦点を当てた研究であるが、この語に限らず日本語の数の概念の理解にも寄与するものである。また、他言語との共通項を示しながら、今後の課題として多言語との言語学的比較に広げているところは、研究の更なる展開を感じさせる。

(3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

コーパスを活用した研究であるが、手法はシンプルであり多くの具体例が示されているため、コーパスに関する専門知識やコーパス研究に馴染みのない読者にとっても理解しやすい。また、語彙研究や第二言語習得研究の分野の研究者だけではなく、教育現場の教師にとっても、現場で得た学習者の言語使用に対する違和感や気づきをどのように分析し研究や教育実践に応用できるのかを学ぶ一例として参考にされるべき論文である。

以上

受賞論文 要旨

人称表現における複数性と不定性

—「人々」の誤用をめぐって—

「人々」という言葉は、「人」の複数と単純に捉えられていることが多いが、単なる複数を意味するわけではない。本稿では、日本語学習者が「人々」という語を、多用・誤用していることに着目し、コーパスの分析をもとに、以下の諸点を指摘する。「人々」には「個性を有した複数性、不定性」や「他者性」といった複数性以上の意味が含まれる。また、この語を学習者が多用・誤用する原因として、学習者の母語での人間複数を指す語の汎用性の高さ、日本語の「人々」の豊語形式の分かりやすさ、さらに、日本語の数の概念の特殊性が挙げられる。特に三つ目の原因が日本語教育においては重要であり、単数・複数の文法的なマークのない日本語では、複数表現が複数性以上の価値を持ちうること、特に人称表現においてはそれが一般名詞とは異なり、発話者の指示対象に対する心的態度や事態の認知の在り方と大きく関係していることに留意する必要がある。

【キーワード】 人称、複数性、不定性、心的態度、誤用

Plurality and Indefiniteness in Personal Expression: Focusing on the Overuse and Misuse of hitobito by Learners of Japanese

MAKI Ayaka

Though the word hitobito is often considered to be the plural form of hito 'person', its meanings go beyond simply expressing plurality. This paper focuses on the overuse and misuse of hitobito by learners of Japanese, employing a corpus analysis to formulate the following arguments. The word form hitobito denotes an indefinite plural group of people, each possessing individuality, combined with the attribute of otherness, which excludes the speaker. Hence, it cannot simply be used as the plural form of hito. However, these nuances are not specified in the dictionary. Causes for the overuse and misuse by learners include the highly versatile nature of expressions for the plural of person in other languages, the fact that the reduplicated form hitobito is easy for learners to recognize, and the peculiar semantics of number in Japanese.

This third factor is particularly important for teaching Japanese as a foreign language. Japanese, does not have obligatory singular or plural grammatical marking, so that plural expressions can have meanings beyond plurality. This is especially true in personal expressions, where plurality and indefiniteness significantly convey the speaker's mental attitude toward the referent, and reflect how the speaker perceives a situation.

【Keywords】 person, plurality indefinite, mental attitude, misuse

(Tokyo International University)

2022年度 日本語教育学会 学会活動貢献賞

受賞者一覧 (50音順)

【授賞対象】

2022年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力員として10年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった学会の個人会員の皆さまに、学会活動貢献賞を贈ります

こ やなぎ
小柳 かおる 氏
た じり えい ぞう
田尻 英三 氏

以上